

SPECIAL INTERVIEW

横浜F・マリノス

坂田大輔

横浜F・マリノスは、1972年に日産自動車サッカー部として創設された横浜マリノスと、1964年に横浜中区スポーツ少年団として設立された横浜フリーゲルズが、1999年に合体して誕生した。ホームグラウンドはみなとみらい。みなとみらい線、新高島駅プラットホームの駅名標識にも「マリノスタウン」と表示されているほど、街の風景と一体化している。そんな横浜F・マリノスの背番号11番、坂田大輔選手は現在26歳。生まれも育ちも港南区。生粋のハマっ子である。田んぼも緑もいっぱいある自分のまち、そしてふるさと「横浜」が、大好きだそうだ。



気がついたらサッカーをやっていた

いつ頃からサッカーをやり出したのかを聞くと、「それが覚えていないんですよ。たぶん幼稚園くらいの頃、親にサッカーグラウンドに連れて行かれたんでしょう。それが始まりだったんじゃないかなあ」と曖昧に笑う。その後、本格的に「自分はサッカーをやっているんだ。サッカーが好きなんだ」と自覚するようになったのが、小学校4年生の頃だという。

野庭キッカーズから横浜フリーゲルズジュニアユース、横浜フリーゲルズユース、横浜F・マリノスユースを経て、高校を卒業して間もない18歳の頃、横浜F・マリノスに入団して、プロのサッカー選手になった。と文章で書くと、とても簡単そうに聞こえてしまう。

しかし実際には、並大抵のことではプロのサッカー選手になど、なれないものである。数え切れないほどいるサッカー少年の中でも、才能に恵まれ、しかも練習に練習を積み重ねても、ほとんどの人が途中で挫折してしまったり、あきらめざるを得ない。それほどプロの世界は厳しい。

それを「僕はサッカーしかやってこなかったから」とひょうひょうとしている坂田選手は、やはりただものではない。

とはいうものの、学校の勉強では本当に苦労したそうだ。

PROFILE

坂田 大輔(さかた だいすけ)
1983年1月16日 神奈川県横浜市生まれ
174cm 70Kg 背番号 11

2001年6月16日 柏レイソル戦でJリーグデビュー
2006年8月9日 トリニダード・トバゴ戦で日本代表(A代表)デビュー

◆横浜F・マリノス公式サイト
<http://www.f-marinos.com>

◆坂田大輔公式ブログ
<http://guapo.cocolog-nifty.com/blog/cat20956958/>



サッカーの練習に明け暮れているのだから、仕方がないことと言えばそれまでだが、「中学校までは義務教育だから卒業出来たけど、高校になると、そうはいかない。赤点を取るたびに、学校の先生や友達に本当によく助けてもらいましたね」という。

どうやら追試の前には、個人指導も先生方からみっちりしてもらっていたらしい。そして友達についても「いろんなやつがいますよ。もう結婚して子供がいるのもいるし」と、今でもつきあいを大切にしている、時間があると時々会っているそうだ。

18歳でプロになる

ところが高校を卒業していきなりプロになり、まわりは大人ばかりである。気おくれするようなことはなかったのだろうか。「18、19、20歳と、あの頃はプロとしての自覚はゼロでした。何をすることも遠慮をせず、30歳過ぎの選手とかにも言い返していました。別に失礼な態度をとるとか、そういうことじゃないですけど」と、当時を明るく振り返る。

「プロとしての自覚がゼロだった」という言い方は、ちょっと誤解を招くかもしれない。子供の頃からスタープレイヤーとして周りを意識し、自分を常に見つめなくてはならなかった坂田選手である。その彼が、毎日の生活を共に過ごし、同じ考えを共有し、プレイをすることが求められるプロチームの一員となった。そんな「集団」の中の「個人」としての自分をどう確立するか。一人の人間としての立ち位置を探し求めていたという方が、的確だろう。

だが、後輩がどんどん入ってきて、選手の平均年齢が22~23歳の若いチームになった今日、自身も26歳になった。自分の足場も固め、かなり落ち着いてきたように見える。しかしそれでも「今でも食べたいものは、ガンガン食いますよ(笑)」と、食に関してはベースを落としていないそうだ。



半年間の怪我休業から学んだこと

真正直でストレートとは、坂田選手のような人のことを言うのだろう。こちらが投げかける質問に対して、相手の目を見ながら丁寧に答えてくる。

そんな坂田選手の今までのサッカー人生において、挫折はなかったのだろうか。

「実は2006年に怪我ばかりして、半年間復帰出来なかった。あの時は正直、落ち込みました。チームが負けると、自分が試合に出たら勝てたんじゃないかと考え、勝ったら勝たで自分が得点を取りに行けたらと、気ばかりあせて。怪我が治るまでもう少し待てと言われても我慢できなかった。ちょっと治るとプレイをして、また怪我をしての繰り返しで、結局グラウンドに完全に戻れるまで、半年位かかってしまった」と、当時は振り返る。

いくらまわりから励まされても、怪我は自分で治すしかない。そしてまた、精神的な落ち込みも、自分でどうにかするしかない。「今ならもう少し我慢できるかも」という坂田選手。それは年齢から来るものではなく、「かなり精神的にもぎつかった」こうした苦い経験から学んだことだという。だからもし、若い選手が今、自分と同じような怪我をしたら、「当時の経験に基づいて、的確なアドバイスが出来ると思う」という。

これからのこと

今後の夢や抱負を聞いたところ、「とにかく一日でも長くプロを続けたい」という、とてもシンプルな答えが返ってきた。「世の中、自分が好きじゃない仕事を、やらなくては食べていけないからという理由から、仕方なくやっている人が、結構いっぱいいますよね。その点、自分は大好きなサッカーを職業としてやっている。本当に幸せだと思う。だから一日でも長く、プロとしてプレイをしていきたい」のだという。

実はサッカー選手の選手生命は、それほど長くない。だいたい30歳前後から引退を

考え出すという。「だから今は怪我もしないように気をつけています。19や20歳だと怪我をして長期間休んでもまだ先が長いけど、今から怪我をして半年とか休んだら、あつという間に引退が近づいてしまいますから」と、表情を引き締める。

そして引退後も「できれば一生サッカーに携わる仕事がしたい」と思っている。だがその一方で「そうした仕事の数には限られていますから」と、クールに自分のまわりの状況を分析する。

だからこそ、例えば一昨年から選手たちの間で自主的に始まった選手会のように、会場やユニホームの手配からチケット販売、子供たちへのサッカーのコーチングも含めたあらゆることを、選手たち自らが企画・運営するイベントなどは、今後数年たって自分がアクションを起こす必要が出てきた時、きっと良いヒントとなるに違いない。

はたちの君へ

最後に、これから新成人となって社会に出ていく人たちのメッセージを求めたところ、「今の20歳の人たちは、まじめでおとなしすぎる気がする。自分の考えはしっかりと持って、のびのびと、ちっちゃくならず、自己主張をすることは大事なんじゃないかな。もちろん性格的にそれが出来にくい人もいるだろうけど」と、コメントしてくれた。

坂田選手は「自分は頭が悪い」と、こちらが驚くようなことを言っていたが、頭の良し悪しは何も学校の勉強だけで決まる訳ではない。一日、一日の人生をどう真剣にとらえ、問題と向き合っていくかによって、知性は磨かれる。

そういう観点からすると、「一日でも長くプロを続けたい」という坂田選手は、日々自分の人生を見つめ、プロ意識をしっかりと持っている。精神的に非常に成熟した大人である。だからこそ輝いているのだ。

そんな人生のスタープレイヤーが、横浜F・マリノスにはいる。

